

原爆被爆者たちは否定された〈生〉を どう生き抜いたか

社会歴史的背景・人間関係・ライフコース・死者との関係という観点からの検討

徳久美生子

はじめに

広島市で原爆（原子爆弾）にあった原爆被爆者たちの中には、特別なコーホートに属する人たちがいる。アメリカが原爆を投下した1945年8月6日の時点で、広島市とその周辺に住んでいて被爆した現在の中学1年と2年の学年だった人たちである。広島市では、7月の軍からの指令により、建物の強制的な取り壊し作業（建物疎開）に国民学校の高等科、旧制中学、女学校の1年生と2年生も動員されており⁽¹⁾、その多くが遮るものがない屋外で原爆の爆風、熱線、放射線に晒され命を奪われた。特に当時1年生だった12歳から13歳の子どものたちの死者数の多さは、際立っている。2年生になると工場などに動員されることもあったが、入学から半年に満たない1年生は、原爆投下時には、主に建物疎開や農作業など屋外での作業に動員されていた。そのため多くの1年生が命を落とすことになってしまった。たとえば、広島女学院高等女学校では、専攻科、専門学校を含めて8学年で330名の生徒が原爆により亡くなったが、1年生の死者は141名と半数近い。多くの同級生を亡くし生き残った当時国民学校の高等科、旧制中学、女学校の1年生だった原爆被爆者たちは、特別なコーホートだと言える。

この学年の原爆被爆者たちが特別なコーホートである理由は、同級生の死者数だけではない。それは、彼・彼女たちが生きていることを3重に否定された特別な共通体験をもつからだ（徳久2013）。

この学年の原爆被爆者たちの〈生〉を否定したのは、第1に原爆という殺人兵器である。そこに人々の〈生〉の営みがあることを根本的に否定する原爆により、彼・彼女たちは、生きている存在であることを否定された。

第2に大人たちの心ない言葉や態度による否定もあった。彼・彼女たちは、亡くなった同級生の親たちや教員たちからの生き残ったことを責める言葉や視線に晒された。子を亡くした母親から直接「なんで生きとったの」と言われた人がある。当日家庭の事情で作業を休み生き残ったことを教員から責められ、転校を余儀なくされた人もいる。

第3に、自分自身による〈生〉の否定もある。原爆による生死は、多くのケースで偶然に左右された。当日作業を休んだこと、作業の場所が変わったこと、さらに進学先や作業場所の違いといったことで生死が分かれた。そのため彼・彼女たちは、自分がなぜ生き残ったのかがわからず、自分の〈生〉を否定的にしか捉えられなくなったのである。

したがって、広島市で原爆にあったこの学年の原爆被爆者たちは、原爆、大人たち、そして自分

自身によって生きている存在であることを3重に否定されたと言う意味でも特別なコーホートだと言えるだろう。

それでは3重の意味で〈生〉を否定された原爆被爆者たちは、その後の時間をどうやって生き抜いてきたのだろうか。2011年から広島市を中心に行ってきた原爆被爆者の生活史調査⁽²⁾では、当時1年生の学年だった原爆被爆者たちを中心に話を聞いてきた。その内国民学校の同級生だった7名の女性たち⁽³⁾からは、私的な同窓会⁽⁴⁾に参加させて頂き、継続して近況やその時々を聞いて聞いている。本稿では、この継続して聞き取り調査を行ってきた7名の女性たちの生活史を中心に、3重に〈生〉を否定された原爆被爆者たちを〈生き抜く〉方向へと向かわせた要因を、(1) 社会歴史的背景、(2) 人間関係、(3) ライフコースの歩み、(4) 死者たち(亡くなった友人)との関係という4点から検討したい。特に(4) 死者たちとの関係は、生き残った後ろめたさや死別の哀しみの源泉ではあるが、死者たちに恥じないように生きる前向きな〈生〉の支えでもあり、さらに現在80代後半を迎えた彼女たちの生き方の指針ともなっている。そこで近づきつつある死と向き合う現在、原爆被爆者たちにとって死者たちとの関係がどのような意味を持っているのかについても考察したい。

尚、本文中では、継続的に調査に協力していただいている同じ国民学校出身の7名の女性たちを、同級生たちと表示する。

1. 社会歴史的背景：生き抜くことが理想の時代

(1) 戦前と戦後との断絶

原爆が身体に残した傷跡、後障害、そして生活の回復の程度は、原爆被爆者それぞれに多様だ。たとえば、食べ物に事欠く生活であっても、その程度には差があった。敗戦後の暮らしもまた原爆と同様に思い出したくない記憶だという方もいる。けれども、「ともかく戦前は、今とは全く違う世界だった」「テレビで見る今の北朝鮮みたいだった」と7名の同級生たちは口を揃える。物心がついた時には戦争だった。お菓子といっても遠足など特別な時に、キャラメルとチョコレートを食べさせてもらったくらいだった。調査の橋渡しをしてくれた晶子さん(仮名)から印象的な話を聞いたことがある。

教育勅語は、直立不動で唱和しなければならなかった。寒い季節には皆鼻水を垂らしていたが、鼻を吸うことができなかった。鼻水が足元に垂れてたまっていくのを見ていて、子ども心にも晶さんは変だと思ったという。

アメリカとの戦争が始まると、食べ物が足りなく、いつもお腹をすかせていた。空襲に備えて服を着たまま寝ていた。呑気に遊んではいても、戦争の暗い影はついて回った。晶さんは、いつ死ぬかわからないからと、友達と大切な物を交換しあっていた。

敗戦後は、世界が変わった。それは、〈死〉が日常の世界から、〈生〉への希望がある世界への転換でもあった。

(2) 理想の時代

同級生たちのリーダー的な存在であり、私的な同窓会の取りまとめ役でもある佳代子(仮名)さ

んは、原爆でうけた火傷の治療後、同じ中学校に復学し、学校制度が変わる中、高校まで進学し、卒業した。学校教育が生徒の自由と自主性を重んじる教育へと大きく変わったことを体感している。別の中学を経て高校で母校に進学し直した晶子さんも、生徒が自由に発言できる校風にふれ、明るいところへ出たような感覚だったと話してくれた。

他方で他の5人は、それぞれの事情から高校に進学できなかった。それでも進学を諦めた陽子さん（仮名）は、自由が制限され、常に命が危険に晒されていた戦争中と比べて、戦争がないことがよいのだと言う。戦争がなければ、未来に希望がある。顔にケロイドが残り家族で父の実家にいた麻子さん（仮名）も、洋裁を習うため広島市内の親族宅にでてきた。

確かに、雑草や芋のツルまで食べた敗戦後の生活は大変だった。けれども大変な生活を生き延びたことは、彼女たちの〈生〉への確信にもなった。あの時代を生き延びたのだから、どんなことがあっても乗り越えられるという確信が、彼女たちの〈生〉を支えた。

見田宗介は敗戦から1960年代までの期間を、「人々が理想に生きようとした」理想の時代と名付けた。見田は、大衆の理想が「アメリカ人のような生活という『未だないもの』にあった」（見田2006: 16）と指摘しているが、彼女たちにとって1950年までの敗戦期は、生きること、生き延びることそれ自体が理想だったのである。

朝鮮戦争の特需をきっかけに、広島市でも復興が進み、敗戦後の飢餓の時代は終わっていった。1951年にサンフランシスコ講和条約が締結され、米軍による占領が終わる頃になると、結婚への準備を始めた人、働き続けた人など、それぞれの人生の軌跡はさらに分岐していった。そして高度経済成長へとつながる時代は、違いはあるが、彼女たちそれぞれに生活の安定をもたらした。

2. 人間関係：人とのつながりを生きる

(1) 〈生〉を肯定する人々

彼女たちは、一部の大人たちからなぜ生きているのかと責められ、〈生〉を否定されたが、彼女たちを助けてくれ、励ましてくれた大人たちもいた。まず親たちにとって、生き残った子どもは大切な命だった。晶子さんのお母さんは、結婚後に酷い貧血に苦しんだ晶子さんを背負って病院に連れて行った。だが彼女たちの命を大切に思ってくれた大人たちは、家族だけではなかった。

戦争中にも関わらず、自分の命を大事にするようにと言ってくれた教師がいた。

建物疎開の作業中に原爆にあい、火に追われて家とは反対の方向に逃げた陽子さんは、民家の老夫婦に助けもらった。逃げる途中で履いていた雪駄を無くし、裸足だった陽子さんは、翌日新しい草履を作ってもらい、途中まで送ってもらって家に帰った。

草取り作業中に原爆に遭い、一旦避難したあと、自宅に戻る途中、燃える街をみて泣き出した佳代子さんは、救助に来た消防団の男性から「生きとったら必ず会えるけえ」と言われた。その言葉に後押しされ、約束していた避難先へと向かった佳代子さんは、父と再会できた。

晶子さんの女学校進学後のクラスメートたちは、建物疎開の作業中にほぼ全員が亡くなった。作業を休んでいたために助かった晶子さんは、原爆で自宅が焼失したこともあり、翌年になっても元の女学校に戻ることができず、親族宅に身を寄せていた。そんな時に、近所に住んでいた郊外の学

校の先生が声をかけてくれて、晶子さんはその学校に通い始めた。新しい友達もできた。家財がなく、雑巾にも事欠く生活をしていても、原爆の影響を受けなかった農村部から通ってくる同級生たちに負けないようにと、焼け出された友だち同士励まし合った。

結婚から10年経っても子どもに恵まれなかった佳代子さんは、舅から「おらん子には泣かされんけん、子どもがおらんこともええもんや」と言われた。子どもが出来ずに離婚された方もいるとは聞いたが、佳代子さんは嫁ぎ先の両親から暖かく見守られた。

人間関係は、〈生〉の否定をもたらすという意味では苦痛の源であったが、生きる支えでもあった。少なくとも、彼女たちの〈生〉は、彼女たちの命を大切にしてくれた大人たちによって支えられてもいた。

(2) 生き残った仲間たち

濱谷正晴は、6744人を対象に行った原爆被爆者調査の結果から、「〈原爆〉で死んだ人たちに思いを馳せ、生き残った仲間たちとともに歩む」(濱谷2005:218)原爆被爆者のあり方を提示した。だが生き残った同級生たちの関係には、原爆体験を共有しているがゆえのナイーブさもある。お互いにナイーブな関係を共有した仲間たちだとも言える。

多くの原爆被爆者たちと同様に、同級生たちも公的な場では、自らの原爆体験を語ってこなかった。⁵⁾ 私的な同窓会でも、筆者が参加するまで原爆体験は語られなかった。同窓会に初めて参加させて頂く際の条件も「根掘り葉掘り聞かない」ことだった。原爆体験は、「おうたもんにはかわからん」という言葉が象徴する絶後の体験であり、非体験者からは体験者に聞きにくい。けれども、原爆被爆者同士が言わない、聞かないことには、非体験者が体験者に聞きにくいことは異なるナイーブな理由がある。原爆被爆者が体験を語らない理由については、別稿で論じた(徳久2013)が、ここでは同級生たちがお互いに原爆体験を「聞かない理由」に着目したい。なぜなら「聞かない」理由に同級生たちの「ナイーブな関係性」が現れているからだ。

原爆体験を聞かない理由は、話したくない理由と結びついている。そのため聞かない理由にも第1に、自分が話したくないから、相手にも聞かないという配慮がある。原爆体験は親しい間柄であっても話しにくい記憶である。第2に、生き残った罪意識の解消に対する躊躇がある。生き残ったことの不条理は、自らの〈生〉の否定をうむが、それを解消し、死者たちに対する罪意識を解消することを、彼女たちは望まないのである。特に、同級生に対して呼びかけて語りを促し、その呼びかけに応じて相手が語れば、自分もまた自分の体験を語ることを促される。それは、語りを促す→相手が語る→語りに対応して自分も語るという、(トラウマ体験をした人々の回復のためのプログラムに見られる)体験を語り合うことで生まれる関係性である。だが彼女たちは、新たな関係性を構築することで、罪意識が解消されることを望まない。それは、第3に指摘できる、死者たちとの関係性の維持、すなわち、死者たちとともに生きる意思へとつながる。同級生同士が原爆体験を語り合い、死者たちに対する罪意識を「仕方がなかった」と解消しあえば、「死者たちを忘れて生きる」という選択肢がひらかれる。だが、忘却は、死者たちとともに生きてきた人生、そして同じように死者たちの記憶を抱える同級生たちのとつながりから、死者たちを排除することになる。語りには、筆者という仲間以外の第3者からの呼びかけが必要だったのである。さらに第4に、同じ体験者で

あっても他者の原爆体験は理解できないという理由がある。原爆という絶後の体験は一様ではない。また原爆体験が彼女たちの人生にもつ意味は、それぞれにとって多様であり、時間とともに変化していく側面もある。自分の体験は理解されただけでなく、自分にも他者の体験は理解できない。彼女たちは、この相互理解の困難に対する諦めの感情を共有しているのである。

死者たちへの配慮から、罪意識の解消を回避し、他者の理解できなさと同者からの理解されがたさを受け入れて生きることは、孤独ではある。けれども、同じ様に罪意識や孤独を抱えて生きる同級生たちがいる。生き抜いている。この仲間たちとのナイーブな関係が彼女たちの〈生〉を支える要因のひとつとなっていると考えられる。

3. ライフコースの歩み：当たり前と考えられている人生を生きる

(1) 女性が主婦化した時代を生きる

1932年と1933年生まれの同級生たちは、「女性が主婦化した」（落合1994:19）時代に結婚した。7人中6名は、1960年までにお見合いで結婚し、家庭に入っている。また原爆にあってから1年の間に両親を相次いで亡くした幸子さん（仮名）も、1956年に仕事先で知り合った男性と恋愛結婚をした。いずれにしても、彼女たちは、女性の専業主婦率が上昇していった時代に主婦となった。そして家事をこなし、子どもを育てることが女性にとって一番大切な仕事だとされた価値観のもとで主婦として生きることになった。

(2) 原爆の影を乗り越え普通に生きる

晶子さんは、同級生たちを評して、「お金持ちだったり、偉くもないけど普通に生きてきた」と言う。とはいえ、原爆は彼女たちの結婚後の生活にも影を落とした。

前述したが、晶子さんには、ひどい貧血症を発症し、歩くこともままならない時期があった。自分がいつ死ぬかわからないから、娘さんにはしっかりしてもらいたいと、鬼のように厳しく育てたという。実際に敗戦から15年が経過しても、近隣には癌や急な病気で亡くなる人たちがいた。

麻子さんは何回もケロイドの手術をうけた。被爆から1年後に両親を相次いで亡くした幸子さんは、独力で生きなければならなかった。

原爆との関連は明確ではないが、友子さんの娘さんは、5歳の時に病気で亡くなった。娘さんを失った友子さんは、「女も働かにかいけん」と思い、仕事を始め、定年まで勤め上げた。

和子さんは、若くして夫を亡くした。親族の手助けを受けたものの、働きながら娘さんを育てた。

トラウマ記憶も彼女たちを苦しめた。あの日の記憶は、日常のふとした瞬間に蘇ってくる。たとえば、プールで泳ぐ子どもたちを見たとき、食事を作っているとき、通りを渡ろうとしたときなど、自分の意思とは無関係にあの日の光景や臭いが蘇ってくるのだという。そして8月6日は、毎年やってくる。同窓生たちは、平常心で8月6日を迎えることができない⁽⁶⁾。平和記念式典にも参加しない。

けれども、原爆の影がおおいかぶさってくるからこそ、彼女たちにとっては、母として、主婦として、大多数の女性たちと同じ価値意識を体現して生きることが大事だったのだと思われる。それが原爆に負けず、人並みに生きていることの証だったからだ。

晶子さんは、夫と子どもの朝ご飯とお弁当を作りながら、掃除や洗濯をこなしていた頃の自分と

比べて、何をやるにも時間がかかる現在を「情けない」と語る。佳代子さんは、外出していても15時を過ぎると夕食の準備が気になってそわそわしてしまうと言う。陽子さんは、パートタイム労働で家計を支えながら子供たちを育て上げた。幸子さんも自営の仕事を手伝いながら家事をこなしてきた。彼女たちは、自分のことより、子どもや夫の都合を優先した生活を当たり前だと考え家事・育児を担う「主婦化した女性たち」である。けれども、大多数の女性たちと同じように生きることが、彼女たちの日常の支えでもあった。大多数の人々の生活と大きく軌道を外れずに暮らすこと、そして今日と同じ暮らしが明日も続くことの大切さを切実に思い抱いて、彼女たちは生き抜いてきたのである。彼女たちは、80歳までライフコースを生き抜いたことだけで満足していた。あの時、死んでいたかもしれないのだから、この年齢まで生きられたことだけでもう十分だと、考えているからだ。癌の再発検査を勧められた陽子さんは、医師に「80歳まで生きられたけ、もうええです」と言った。陽子さんの話を聞いた同級生たちも、口々に「もうええ」と言った。この「もうええ」という言葉の背後には、死者たちの存在がある。死者たちと比べたとき、自分の人生の苦難は低く見積もられ（徳久 2013）、生き残った罪悪感が主題化される。だが死者たちの存在は、彼女たちの苦難の源ではあるが、彼女たちの〈生〉を支えてもきた。では、死者たちの存在は、彼女たちの〈生〉をどのように支えてきたのだろうか。

4. 死者たちとの関係：死とともに生きる

(1) 特別な死者たち

同級生たちは、原爆で亡くなった級友たちを思い、生きてきた。死んでいった友だちに対して、生き残ったという罪意識は消えることがない。また前述したように消すつもりもない。佳代子さんは言う「あの人らの犠牲の上にそれらがある。自分が作った罪ではないけど、先に自分らの幸せがある。生きとる私ら自然にそういう気持ちが出てきた」。また彼女たちそれぞれに、特別な罪意識を抱える死者たちがいる。

佳代子さんは、今も自分の選択が運命を分けたことに割り切れない思いを抱いている。

佳代子さんは、県立広島第一高等女学校（通称：第一県女）に進学したかった。けれども、進学先を決める時期に、第一県女への進学を希望する生徒たちが集められ、「この国民学校から第一県女には、毎年4名しか合格者が出ない。誰か別の学校に変わってくれないか」と言われた。佳代子さんは、考えて、担任の先生が勧めてくれた別の女学校に進学した。幼稚園の頃からの親友は、第一県女に進んだが、爆心地近くで建物疎開の作業中に原爆に遭い、帰ってこなかった。佳代子さんは、「運が良かったとは言いつないよ。死んだ人に悪い。死んだ人は運が悪かったことになってしまう」とも言う。偶然生き残ったことに加えて、親友に何もしてあげられなかったことも、佳代子さんを苦しめた。避難先の小学校で、佳代子さんは親友の父親から「〇〇子、みなんだか」と聞かれたが、何も答えられなかった。労力を惜しまず兄弟や友だちの世話をしてきた佳代子さんは、大事な友だちに何もできなかったことを今も悔いている。

晶子さんは、学級委員だったが、当日建物疎開の作業を休んでいて生き残った。働いていた級友たちが亡くなり、休んでいた自分が生き残ったことが後ろめたいのだと言う。物心がつく頃から戦

争の時代だったから、亡くなった級友たちは、美味しい食べ物を知らずに死んでいった。今でもおいしい食事をすると申し訳ない気持ちになるという。晶子さんには、女学校に入ってから、新しい友だちができた。東京から進学してきた子だった。大人しい子で、いつも晶子さんの後ろについて歩いていた。女学校へも一緒に通っていた。東京から転居してきたため、親同士のつながりもなく、その友だちが原爆の後どうなったのか、わからなかった。晶さんは、ずっと気になっていた。25年後、原爆忌の前に広島市が市報に載せる身元不明者のリストに、その友だちの苗字を見つけた晶さんは、遺骨を引き取りに行った。遺骨は、既にお兄さんに引き取られていたが、晶さんは、友だちと交換していたガラスの文鎮を返そうと、東京まで行った。墓参りも済ませた。「私が覚えていればいい」と晶さんは言う。「どうせ忘れられないんだから」と。

麻子さんは、あの日の朝、シャベルを持って建物疎開の集合場所に向かう途中、友だちに会った。その子は、学童疎開に行く弟を送りに行き、自宅に戻ったところだった。それでも麻子さんから建物疎開の作業があると聞くと、自分もシャベルを取りに行き、一緒に集合場所に向かった。後になって、作業中一緒に原爆にあったその子は、亡くなったと聞いた。大火傷をおった麻子さんは、命を取り止めた。あの時声をかけなければ、あの子は死なずに済んだのに、悪いことをした。と麻子さんは、今も悔やんでいる。

陽子さんは、避難先の広場に火が迫る中、歩けなくなった3人の友人を、側にいた兵士たちに託して逃げた。兵士たちに「後ろを見ずに逃げろ」と言われたからだ。だが兵士たちに託した友人たちは、亡くなったと後でわかった。火に追われたとはいえ、友人たちをおいて逃げたことは、罪意識となり、消えることはない。

さらに、旗を振り戦争を肯定していたにもかかわらず生き残った悔恨の思いもある。

ただし、こういった死者への思いや、生き残ったことに対する罪意識は、生きられなかった死者の分もきちんと生きなければ申し訳ないという、前向きな〈生〉の支えになってもある。それは、樽川典子が、阪神・淡路大震災の遺族への聞き取り調査の結果から分析した「使命感」（樽川2007: 12）に通じる感情でもある。ただし、阪神・淡路大震災の遺族たちの「使命感」は、死者との一体感から生まれたものだったが、同級生たちの場合は、一体感というよりは、自らの未来の死へと生きる責任に結びついている。考えておきたいのは、この未来の死へと生きる責任が、彼女たちの日常的な〈生〉とどのように結びつき、それを支えているのかである。

そこでこの点を、他者関係から日常の生活世界の成り立ちを論じたシュッツとルックマンの議論を参考にしながら、検討したい。

(2) 日常の生活世界と死者という他者

私たちは、シュッツが、「われわれが生まれるはるか以前から存在し、われわれの先行者である他者たちによって、すでに組織された世界として経験され解釈された、相互主観的世界である」日常の生活世界（Schutz 1976= 1991: 10）に生まれ、日々を過ごしている。この生活世界は「私的な世界ではなく、われわれすべてに共通する世界である」。そこには「多様な社会関係を通して私と結びついている諸々の他者が存在している」（Schutz 1976= 1991: 23）。

他者たちとの関係、すなわち他者関係は、様々な親密性と匿名性を示す（Schutz 1976= 1991:

45)。個人の視点から見た時、他者関係は、対面状態にあり相互に同時的な意識の流れを共有し、共に時を経ている「われわれ関係」を基盤に、同時代者との関係、先行者の世界、後続者の世界へと匿名性が増大する諸層へと広がっている。シュッツとLuckmannは、この他者関係の中の「われわれ関係を回復することがもはや不可能になっている、以前のわれわれの共在者」(Schutz and Luckmann 1973= 2015: 168) に死者を位置付けている。つまり、同級生たちにとって亡くなった友人である死者たちは、かつては、学校や近隣といった「われわれの体験の到達可能な世界」を共有し、このことによって、「他者たちの体験について私が解釈した結果を不断に検証することが可能になる」(Schutz and Luckmann 1973= 2015: 57) 直接的な経験を共有していたが、現在は直接的な関係が回復することはない他者たちということになる。

かつては「われわれ関係」にあった死者たちは、死によって生活世界から離脱した。その事実は、同級生たちに「時を経る存在である」自分もまた「死ぬであろうこと、そして自分が死んだ後も世界は永続していくこと」(Schutz and Luckmann 1973= 2015: 122) を認識させることになったと考えられる。だが未来の自らの死という認識は、どのようにして生きる責任へと転嫁するのだろうか。

考えておきたいのは、未来の自らの死へと生きる責任には、〈生〉へと向かう2つの志向性があることだ。第1に失われた死者の分まで生きるという志向性である。内田樹は、ホロコーストを生き延びたレヴィナスの言葉を解釈し、「生き残ったものと生き延びることができなかった者との間に、納得できる理由がない」(内田 2004: 96) なかで、生き残った者は、自分が生き残った理由がわからないために、生死の境界線を引くことができない。それは、「生きていることの根源的な無根拠性に耐える」(内田 2004: 162) ことでもあると指摘する。「それゆえに生き残った人々は、例外なく死者を弔うことを最優先の責務として引き受け」、「生き残ったことをそれでも自分に向けて合理化する言葉があるとすれば、私たちは自分たちの責務に加えて、あなたたちの責務もあわせて引き受け、それによってあなたたちが死んだことによってこの世界にもたらされた欠如を最小化するつもりである」(内田 2004: 163) と述べている。確かに、個人の死によっても世界は永続していくが、欠如は生じる。その欠如を最小化するために、生き残った人は、死者の分まで生きる責任を負うのである。

しかしシュッツとLuckmannが言うように、「自分の生活世界と折り合いをつけ、困難を克服し、プランを企画し実行する」(Schutz and Luckmann 1973= 2015: 122) ためには、第2の志向性である、死者たちに恥じないように生きる責任が求められる。この死者たちに恥じないように生きる責任は、死後の世界での再会を想定することから派生する。そして死者たちが過去に「共に時間を経る」他者であっただけでなく、未来で死という同じ経験を他者であるから、死者たちに恥じない生き方をしたいという志向が生じる。生き残った者たちは、死者たちに恥じない生き方をするために、未来にいる他者の視点から、自らの〈生〉を捉えなおすことになる。

死者たちの分まで生きる、死者たちに恥じないように生きると言う、未来の死へと生きる責任は、生き残った者である同級生たちを〈生〉へと向かわせる要因にもなったと考えられる。

5. 未来の死へと生きる強さと明るさ

ここまで、原爆から生き残った同級生たちの〈生〉を支えた要因を、社会歴史的背景、人間関係、ライフコースの歩み、死者たちとの関係という4点から検討してきた。いずれの場合も、彼女たちは、敗戦後の苦難、原爆の心身への影響、罪意識といった〈生〉を否定する要素を、〈生〉へと向かうエネルギーに反転させて生き抜いてきている。いわば反転の積み重ねが、〈生〉を支えてきており、現在がある。彼女たちがしばしば口にする「私らはしぶとい」と言う言葉の裏には、困難を乗り越えた強さがある。それは、原爆の身体への影響を乗り越えてきた強さでもある。晶子さんは甲状腺機能障害の治療を続けてきた。陽子さんは3回、幸子さんは2回、癌の手術をした。麻子さんは何回もケロイドの手術をうけた。和子さんは視力が落ちていった。

さらに聞き取り調査を始めてから9年が経過するなかで、同級生たちが生きる生活世界は大きく変化した。一言で言えば、死がより身近になったのである。9年の間に、4名が配偶者を亡くした。2018年には和子さんが、亡くなった。体調が悪化し、介護施設に入居した方も2名いる。だが死が身近になることは、死者たちと同じ経験が近づいていることを意味する。さらに言えば、死が近づくということは、死者たちに対して生きる責任を果たしたということでもある。

原爆体験証言者として活動してきた細川浩史さんは、90才を前に長く介護してきた奥様を亡くし、自らの死を思う日々を送っていたときにこう語った。「死ぬことが怖くないわけではありません。経験したことがないことです。でも楽しみでもある。あちらに行った人たちともう一度会えるわけですから」。同級生たちにも細川さんに通じる、死を楽しみと言える強さと明るさがある。

コロナ禍もあり、2020年春以降、私的な同窓会の開催は困難になった。それでも、彼女たちは、明るく、ユーモアに溢れている。電話をすると必ず笑いを誘う話をしてくれる。「おばあさんたちの下らない話を聞いてもしょうがないでしょ」と言われながら参加させてもらった同窓会は、本当に楽しかった。罪意識や孤独につぶされず、病を明るく乗り越えていく彼女たちを見ていると、彼女たちが生き抜いていることが、人々の命を破壊し尽くし、彼女たちの〈生〉を否定した原爆に対する最大の応答であるように思える。

しかしながら、同級生たちの〈生〉がいかに力強く、明るさを放っていたとしても、「われわれ関係」にあった友人たちを死に追いやり、彼女たちに苦難を強いた原爆がどれほど「人が生きる道」から外れた兵器であるかを忘れず、伝える必要はある。それは後継者である私たちの責務であろう。

佳代子さんの朝は、広島平和記念公園周辺のウォーキングから始まる。ウォーキングの途中で、佳代子さんは、広島第一県女と広島市女（広島市立第一高等女学校）の慰霊碑に立ち寄る。慰霊碑に刻まれた国民学校の同級生たちの名前を撫でるためだ。そこに刻まれた名前は、自分だったかもしれない、その思いは消えることがない。そして同級生たちが共有しているその思いを、私たちは消してはいけない。

注

- (1) 生徒を建物疎開作業に動員することは酷暑の時期、空襲の危険を憂慮した学校関係者の反対を軍責任者が押し切って実行された（関2015: 54）。
- (2) 聞き取りによる「被爆者」の研究は、筆者が、平成25年度科学研究費学術研究助成基金助成

金（挑戦的萌芽研究）を受けはじめた生活史調査である。これまでに、26名（2021.4月現在）の原爆被爆者にインタビューを行った。その内、本稿で取り上げる7名を含む10名からは継続して話を聞いている。

(3) 継続して話を聞いている同窓生たちの個人データは、以下の通りである。

国民学校同窓生のパーソナルデータ（名前は全て仮名）

名前	佳代子さん	晶子さん	幸子さん	麻子さん	陽子さん	友子さん	和子さん
被爆時の所属	公立女学校	私立女学校	私立女学校			病気療養中	私立女学校
被爆状況	屋外動員作業（草取り）中	自宅	屋外での建物疎開作業中			自宅	市外の学校
当日の状況	火傷	火傷・怪我無し	重い火傷	重い火傷	軽い火傷	黒い雨	怪我なし
後障害	ケロイド	甲状腺機能障害	ケロイド・2度の癌	ケロイド	3度の癌	白内障	白内障
家族の状況	被害無し	姉が意識不明（回復）・母が64歳で癌で死亡	祖母が原爆死・両親が1年後に死亡	被害なし	姉が行方不明・父が5年寝たきり・母は5年後に死亡	翌年母が病死・子どもが病死	父骨折・母火傷
最終学歴	元の中学→高校	別の中学→元の高校・短大	疎開先の女学校（中退）	中学	中学	中学	専門学校

死亡、あるいは施設に入るなどの事情で掲載の内容を確認してもらえなかった方のデータは、個人を特定できないように一部加工している。

- (4) 私的な同窓会は、国民学校の同窓会をきっかけに再会した7名の女性たちによる年2回の集まりである。
- (5) 正確には、佳代さんは町内会の冊子に体験を書いたことがあった。また、筆者が同窓会に参加した後佳代さんは証言をはじめた。幸子さんも手記を執筆した。
- (6) 晶さんは8/6が近づく体調をくずす。忘れていた記憶がよみがえることもある。

参考文献

- 濱谷正晴, 2005, 『原爆体験 六七四四人・死と生の証言』 岩波書店.
- 見田宗介, 2006, 『社会学入門：人間と社会の未来』 岩波新書.
- 落合恵美子, 1994, 『21世紀家族へ：家族の戦後体制の見かた・超えかた』 有斐閣.
- Schutz, A. 1976=1991, 渡辺光・那須壽・西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集第3巻：社会理論の研究』 マルジェ社.
- Schutz, A. and Luckmann, T., 1973 = 2015, 那須壽監訳『生活世界の構造』 ちくま学芸文庫.
- 関千枝子, 2015, 『ヒロシマの少年少女たち：原爆、靖国、朝鮮半島出身者』 彩流社.
- 樽川典子（編）, 2007, 『喪失と生存の社会学—大震災のライフ・ヒストリー—』 有信堂.
- 徳久美生子, 2013, 「被爆1世の沈黙の意味と抵抗：J. バトラーの「自己に関する説明」を手がかりに」『年報社会学論集 26号』 147-158.
- 内田樹, 2006, 『他者と死者：ラカンによるレヴィナス』 海鳥社.